文化財保護に理解

県協会諏訪支部が研究発表会

県文化財保護協会諏訪支部（伊藤文夫支部長）は1日、研究発表会を諏訪市の諏訪教育会館で開いた。会員2人が研究成果を発表。会員ら約15人が参加し、地域に根差した文化に理解を深めた。

矢﨑俊作さん＝茅野市塚原＝は「消えゆく諏訪の名物鉄平石の屋根」と題して発表した。矢﨑さんによると鉄平石は安山岩の一種で、割ると平らになる。1884（明治17）年ごろ出現し、採石場のある諏訪地域では民家や蔵の屋根になどに多く利用されてきたという。

鉄平石の歴史や屋根の構造を示し、「1平米約80キロで、ほかの屋根材と比べてもかなり重い。手を出しにくい素材のため昭和40年代から需要が少なくなった」と説明。諏訪地域に残る鉄平石を使った家屋などを紹介し、「かつては『諏訪の名物』とも言われていたが、どっと減った」と語った。参加者は実際の鉄平石を見て、重さや質感を確認。矢﨑さんは「自然の風景に溶け込むところが良さ」と話していた。

このほか、会員で原村教育委員会の松森多恵さんは「原村の裂き織り（ぼろ機織り）」をテーマに発表した。

（松本佳林）

実際の鉄平石を前に、特徴などを紹介する会員の矢﨑さん㊨